

地域住民の参加による谷津田の再生と酒米生産

草木谷を守る会

石川 紀行・石井 善春・藤原 直人

1. 草木谷を守る会とは

八郎湖再生と里山保全を標榜する「草木谷を守る会」の活動は、皆さまの暖かいご支援、ご協力をいただき、今年で8年目となります。

草木谷というところは、石川理紀之助翁資料館（潟上市）から約1.5km山奥に入った谷津田で、面積は約1haです。臭木（くさぎ）が多く生えていて、熊やかもしか、たぬき等が闊歩している自然豊かな里山です。

明治から大正にかけて疲弊した貧村を次々に復興させ「聖農」と言われた石川理紀之助が、村民の生活向上をめざし、地主でなく小作人として自らが貧農体験した由緒ある地でもあり、理紀之助の一生涯の心の原点になっているといってもいいところでは。

谷津田（草木谷）は下流の湖や海の重要な水源地であるほか、野生生物にとっても重要な生息地ですが、現在は、高齢化などで管理が大変なため耕作放棄等による荒廃が全国的に顕著です。「草木谷」も20数年間耕作放棄され同様の状況でした。

「草木谷を守る会」は、この自然豊かで美しい田園風景と、下流にある八郎湖の保全・再生に向けて、環境に配慮した無農薬、有機肥料での米づくり（餅米・酒米）を昔ながらの手作業で、地元小学生や地域住民とともに取り組んでいます。

「草木谷」での活動を通じて、生きものを育み、自然環境を保全することにより、里山のすばらしさを多方面に発信し地域の活性化を図っています。

2. 活動のきっかけ

秋田県は、平成13年頃水質汚濁が深刻な八郎湖は、上流から下流まで一体の流域管理が必要であると考えました。そこで秋田地域振興局が平成16年に、湖の自然再生を実践している住民団体の支援や、湖への環境意識の啓発、地域活性化を図るプロジェクトとして、「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」をはじめました。

そうした中、八郎湖の環境悪化を市民に伝えていく啓発的な活動だけでなく、未来を担う子ども

たちへの、具体的な環境学習も必要だという機運が高まってきました。

20数年間耕作放棄されていた、八郎湖の水源地である「草木谷」を田んぼとして再生し、里山の田園風景と、下流にある八郎湖の保全・再生活動を、地元小学校の環境学習プログラムの一つとして「谷津田再生プロジェクト」を、秋田地域振興局とともに平成19年にはじめたのがきっかけです。

八郎湖の水源地としての機能確保、自然体験型環境教育の実践、地域の活性化に資することを目的とした「谷津田再生プロジェクト」は、学校をはじめ、市民団体、企業、行政が協働する、八郎湖流域全体をカバーする活動へと発展しています。

3. 石川理紀之助の教え

「樹木は祖先より借りて子孫に返すものと知れ、天地の御恵み忘れるべからず」これは100年前の理紀之助の発信です。「天から生かされている。天に感謝しなさい。畏敬の念を持ちなさい。自然のすべては借り物ですよ。返すのは子孫ですよ…」という意味です。八郎湖と草木谷、そして理紀之助というのが私たちの活動の原点、求心力となっています。

子どもたちと一緒に「みんなが喜ぶ田んぼ作り」をめざして挑戦した結果、理紀之助の教え（訓言）が現代にもつながっているということにより強く感じるようになりました。

農薬・化学肥料を使わない農業は、環境にやさしく、土はやせないのが大地（地球）が喜びます。

長年の耕作放棄地（草木谷）を水田として復活したことで、八郎湖への天然ダム水源地としてよみがえったことで八郎湖が喜びます。

活動2年目の平成20年1月18日、福田内閣総理大臣（当時）が、「第169回国会における施政方針演説」で「井戸を掘るなら水の沸くまで掘れ」と述べました。これは理紀之助の訓言です。何事もあきらめるな、一人前になるには時間・努力がいる。最後までやり通せということです。

「草木谷を守る会」という団体名にした以上、理紀之助の教えの通り、私たちもいい加減な活動はできないと思っています。

谷津田（草木谷）を守っていくというのは難しいことですが、「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」に参加し、子どもたちの笑顔があった結果、谷津田（草木谷）再生が進んだと思います。

「草木谷を守る会」の基本には冒頭で述べましたように「八郎湖と石川理紀之助」という大きな2つのキーワードがあり、どちらかが1つ欠けてもバランスが悪くなると思い、同時進行型で活動しています。

谷津田で無農薬での稲作は実際大変です。しかし、この活動から生まれる子どもの笑顔が、何よりも力になり楽しく活動できました。下流域のことも考え、農作業の代かきにおいては、余計な排水を流さないように考えるようにもなりました。

4. 草木谷を守る会の一年

●春、田植えです。

「田んぼの学校」の1年がスタート！

子どもたちは、最初は恐る恐る田んぼに入ります。ドロが付いたと言っては汚いと大騒ぎをしますが、結局、最後には全身ドロだらけです。

●夏、草取り。

減農薬で育てている草木谷の田んぼは、草がびっしり。無農薬の米作りで一番の労力を必要とする草取りを、泥の感触や初夏の自然を感じながら、手押し除草機などで作業します。

●秋、稲刈りです。

子どもたちはみな、恐る恐るカマを使っています。「ザクザクという音が気持ちいい！」慣れてくるとスピードアップ。

今の子どもは鉛筆削りのナイフさえ持ったことがないのに、切れて危ないノコギリ型の稲刈り鎌を使っての作業です。危ないと認識し、よく注意して作業します。怪我も無く刃物である鎌をしっかり使いこなします。

●秋、脱穀です。

足踏式脱穀機（ガーコン）と唐箕（とうみ）での作業は、昔ながらの懐かしい実りの風景です。

●収穫感謝祭です。

収穫したもち米で子どもたちと、臼と杵で餅つきをします。つきたてのお餅はやはり一番で、収穫の喜びを感じる瞬間です。

また「田んぼの学校」と併行して、飯田川アウトドラスクール（代表 伊藤和人氏）の協力で自然観察も行っています。生きもの観察では、トンボ（ヤゴ）やカエルなど、田んぼにすむ生き物との出会いも楽しめます。

観察の結果、予想以上にたくさんの生き物や植物を目にし、すでに生息していないと思っていたヤツメウナギ、サンショウウオなどが見つかったのは新たな発見、喜びでした。

草木谷周辺では、400種以上の植物があると言われています。無農薬なので田んぼの周りの植物・生き物がダメージを受けません。生き物たちは食物連鎖を行いうまくバランスをとっています。生き物が元気に生息できる環境の後押しをして、生き物にも喜びを与えている活動だと自負しています。

自然に触れ合う機会が少ない現代っ子たちは、田んぼの中では無邪気で子どもそのものです。草木谷中に子どもたちの声が響き、静かな里が一時、とても賑やかな楽しい里山になります。昔を思い、想像しながらのこの体験は、情操教育の一助になっているとも言われ、きっと大人になっても心に残ってくれる活動だと思っています。

家の中で過ごすことの多い子どもたちにとって、ご家族の皆さんにも喜ばれています。

私たちも楽しく作業ができることが何よりの喜びでもありますが、特に草木谷という里山の原風景を、この「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」を通して、取り戻せたことが最大の喜びです。

1つの喜びには連鎖の力が生まれてくるような気がしてなりません。

5. 他団体との交流

草木谷の稲作は、大森山動物園（園長 小松 守氏）の「ゾウさん堆肥（有機肥料）」を提供していただいで栽培しています。

毎年稲刈り終了後、脱穀した生の稲わらは資源循環型農業の目的で、「稲わら贈呈式」を同園で行い、ゾウさんへエサとしてプレゼントしています。

初夏、草木谷では源氏ホテルと平家ホテルが幻想的に舞います。ホテル鑑賞は自然からの贈り物です。里山保全活動でホテルがよみがえり、確実に増えています。神秘的な光を放つホテルは子どもの感性を養い育てていくのに力を貸してくれま



大豊小環境学習
「田んぼの学校」 田植え



大豊小環境学習
「田んぼの学校」 生き物観察



地域住民との交流
秋田おばこ姿で「酒米栽培」 稲刈り体験



資源循環型農業
生稲わらを大森山のゾウさんへプレゼント



大豊小環境学習
「田んぼの学校」 稲刈り



活動の副産物
純米吟醸「草木谷のしぶき」



5月24日発行 秋田さきがけ
大豊小「田んぼの学校」田植え



3月27日発行の農業共済新聞
「純米吟醸 草木谷のしづき」の紹介



10月19日発行 朝日新聞
大豊小「田んぼの学校」稲刈り編



秋田県ボランティア・NPO活動ニュース
中央地区版「かだれ」11月号の表紙



むつみ造園土木株式会社 季刊誌
「GreenThumb. NO. 12」草木谷を守る会の紹介



フリーマガジン のんびり Vol. 7
草木谷を守る会の紹介

す。親子・家族で一緒に見て素朴な神秘さに感動をして欲しいと思います。

このホテル観賞会では、「ともしびプロジェクトAKITA」（代表 三浦将人氏）のご協力、真っ暗な草木谷へ続く夜道を幻想的なキャンドルで足元を灯していただいています。

さらに、「秋田星っこの会」（代表 菅原淳一氏）の大型望遠鏡で、初夏の星空観察会も行っています。ホテルとキャンドルと星空の競演には、皆さんからは、毎年、歓声があがっています。

また、八郎湖問題は、水系をたどれば農業だけではなく林業との関係も深く、草木谷周辺の山林維持にも目を向けることができました。山林は何年も全く手入れがされず放棄状態で、真っ暗で下草もなく当然、保水力はほとんどありませんでした。

秋田県森の案内人協議会（会長 工藤 正氏）主催の「森のきこり塾」の力を借りて、枝打ち、間伐の体験作業、植林体験作業の場として草木谷周辺の山林の提供もしています。

当地は、環境面での機能は失っていないことから、一連の取り組みの中で今後は、山林の手入れ維持も心掛けたいと思っています。

私たちの先輩格でお手本にもしている、茨城県のNPO法人アサザ基金（代表 飯島 博氏）と連携し、来年度から新たな試みも考えています。

6. 活動の副産物 純米吟醸「草木谷のしぶき」

これまで、小学生に米作りを体験してもらう「田んぼの学校」を行ってきましたが、「大人にも活動に参加する楽しみを」との声を受け、平成21年5月から地域住民と共に田植えや稲刈りを行い、加えて下流の八郎湖の浄化のために減農薬で酒米づくりにも挑戦しています。

収穫した酒米は、五城目町の福祿寿酒造（社長 渡邊康衛氏）で純米吟醸「草木谷のしぶき」という“草木谷”の名を入れたお酒に生まれ変わり、地場産業の活性化にも一役を担わせて頂いております。

毎年蔵開き頃、新酒披露会を開催し参加者たちは新酒が詰められた酒瓶に、自分たちの手でラベルを張って最後の仕上げを行い、コップについて豊かな香りと味の新酒を楽しみます。

私たちのお酒はスタイリッシュな飲み方としてのジャンルに入り、とても飲みやすくマイルドで

フルーティーに仕上がって高級感のある味で、女性にも人気のあるお酒です。

自分たちで育てた米から酒を造るという、大人ならではの農業と食の楽しみ方は面白いと思います。自宅ではできない酒造りを、材料から本格的に育てるということで出来上がった時の達成感や喜びは格別です。

こうした取り組みが広がれば休耕田や休耕地の活性にもつながり、環境に対する姿勢や考え方も変わるのではないのでしょうか。

「この酒を通じ、草木谷や八郎湖の再生に少しでも関心を持ってほしい」これが私たちの思いです。

7. 肩肘はらず、息の長い活動を

「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」に参加したことで私たちには、上流部としての意識変化を与えてくれました。案ずるより産むがやすし…重く受け止めず気楽に息の長い取り組みを目指していこうと思います。

皆さまから感謝の気持ちをいただくことがありますが、逆に感謝したい気持ちでいっぱいです。「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」の趣旨をご理解いただき、1年を通して「草木谷を守る会」の重要な活動に、若いひとから県外の方など幅広く参加していただき、汗を流し、活動を後押ししてくれています。

また一昨年から、草木谷を守る会のフェイスブックページを開設し、若い人たちや他団体との情報交換を深めてきました。今後も、環境学習における里山保全・八郎湖水質改善に向けて、これからは肩肘はらずに地域活性化のために取り組んでいきたいと思っています。

草木谷を守る会のメンバーは年々、年齢層が高くなっていきますが、私たちは私たちにモチベーションを高め、地域ハンディーを乗り越えて、環境学習・地域活性化に向けて活動し、谷津田（草木谷）も八郎湖もきれいにして次世代にバトタッチしていきたいと思っています。

今後は、都会の人たちとの交流や、草木谷でできない住民との交流やふれあいが楽しめ、スローライフを体験できる滞在型の観光を提案していきたいと思っていますので、「草木谷を守る会」をどうぞよろしく願いいたします。